
白

梅雨光線

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白

【Nコード】

N2296I

【作者名】

梅雨光線

【あらすじ】

「明日は休みだ」

休暇が終わるれば、会社にいき、上司の機嫌をうかがい、同僚とたわいもない話を肴に酒を呑む。

そんな毎日が続いていくと思っていた。

(前書き)

はじめまして

友人に出されたテーマを元に、執筆してみました。

テーマは「色」

こういうのは苦手な人がいるとは思いますが、私は結構好きです。
短いので、暇つぶしにどうぞ。(・A・)っ

雲の切れ間から差し込む月の光と、道の両脇に等間隔でたてられた街灯を頼りに、私は自宅へとたどり着いた。

「ただいま。」

静寂の返事を聞き、少しため息をつく。

酔いの覚めない頭で、ぼんやりと明日のことを考える。

去年は一度も有給をとらなかったのも、今年は夏が終わる前に休むことにした。

会社を休んだところで、これといってすることもないのだが…。睡眠をむさぼるだけではもったいないし、古本屋にでも行こう。

明日のプランも完成したところで、私はベッドに沈みこんだ。

蝉の合唱が聴こえる。

夏もう終わりだというのに。

まるで、火災報知器のような騒がしさだ。

何か危険でも迫っているのか？

「…考え過ぎか。二日酔いかなあ。」

気分はすぐれているし、頭はスッキリしている。

「空も見事に青空だな。」

会社を休んで正解だったようだ。

こんな日に仕事なんて、それだけで気分が曇ってしまう。

会社の人々には悪い気がしたので、アイスの差し入れでも持って行こう。

「なんだこれ？」

私は、玄関へ朝刊を取りに来たつもりだった。

だがしかし、私が朝刊のかわりに目にしたのは白い塊だった。

「いたずらか？」

白いそれに触れてみると、ザラザラとした乾いた感触が指先に感じられる。

この白いものは、どうやら私の探していたものらしい。

本当にこれは新聞なのだろうか。

私はそれを「白い」と表現してみたが、色が白という意味ではない。

その物体には影がなく、まるで、世界から切り取られたような…。

「疲れてるな。」

問題があるのは私の方かもしれない。

そう自分に言い聞かせ、私は朝刊をテーブルの上に置いた。

一応、眼科に行っておこうと思い、私は電話を手にとった。

「特に異常は無いですね。」

その言葉を聞いた私の体は、ほっとするのではなく、嫌な汗をかいていた。

眼科をあとにした私は、昨夜たてたプラン通りに、古本屋に行く気にはなれなかった。

誰もいない公園のベンチに腰掛け、ぼーっとしていた。

先程まで青かった空は、薄い雲で覆われている。

「アイス…。」

あまり気が乗らなかった。

でも、何かしないと、誰かに会わないと、自分が自分で無くなるよ
うな、そんな気がしたのだ。

「あれ〜？休みじゃなかった？」

「一人だけ休んで、みんなに悪い気がして。これ、差し入れ。」

「おっ！サンキュ〜。みんな！アイスが来たぞ〜！」

「随分元気だな。仕事してたのか？」

「なっ！失礼だな。ちゃんとやってるよ。休みのお前と違ってな。」

「…没収。」

「あ！すいませんでした。ごめんなさい。返して下さい。」

「ほれ。」

「ぎゃー！ー！！投げるなー！」

「ははは…」私は、必死に誤魔化していた。

デスクの上にあったボールペンが、白かった事を。

自分に言い聞かせていた。

そんなものは見てないと。

自分を誤魔化していた。

空は相変わらず曇っていた。

私は、飯でも食べようと思い、行きつけの蕎麦屋へと向かった。

店の前に並んでいるサンプルを見て、食欲が失せた。

白かったのだ。

今朝の新聞のように、影も無く白いそれを見て、私は想像してしま
った。

もし注文した蕎麦が、麺も、葱も、汁も器も、全てが白くなっていたら…。

「全て…が？」

私は空を見上げてしまった。
空は相変わらず曇っている。

「いや、違う…。」空は曇っているわけではない。
私の目には、白くなって見えているのだ。

全身から嫌な汗が流れてくる。

これは夢なのだろうか。

夢ならば早く覚めてくれ。

早く 早く 早く

ふと、視線を下げると、そこには私の手があった。
白くなった、自分の手が。

私は叫んでいた。

その目に見えている光景を否定するように。

私は走っていた。

恐怖から逃れる為に。

目にうつるものが、次から次へと白くなっていく。

道端に等間隔で並ぶ街灯

街を彩る木々や草花

無機質な建物

道路を走る自動車

街を歩く人々

コンクリートの地面

世界が真っ白になっ…

体の左側に、強い衝撃を受けた。
私は地面に叩きつけられた。
手がやけに温かい。
何かついているようだ。

「…血？」

誰かの声が聞こえる。
蟬の合唱で何も聞きとれない。
なんだか、眠くなってきた。
目の前が、真っ白になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2296i/>

白

2010年12月21日14時17分発行